



図 7.2 自分でも展示を手がけてみたいが、その前にまだまだ勉強することがたくさんある、と語る小峰さん

されていることを知らない町民が意外にも多くいることに驚いており、町民に対する普及活動に力を入れていきたいと考えています。日本で初めて本格的に調査された水中遺跡である開陽丸の保護と活用は、日本の水中考古学の発展につながるため、各種事業や調査を精力的に行っていきたいと語ってくれました。

(インタビュー 石井淳平)

## 7.2 中世館跡を掘る（上ノ国町教育委員会・佐藤貢平さん）

佐藤貢平さんは、令和3年（2021）3月に札幌学院大学を卒業し、同年4月に上ノ国町教育委員会に奉職しました。現在は、塚田直哉主幹（当会事務局長）とともに史跡上ノ国館跡洲崎館の調査を進めます。

札幌学院大学時代にはなるべく多くの現場経験を積むために、現場に参加できる機会を逃さないよう、積極的に発掘調査に参加していたと言います。発掘現場が減少している現在、発掘調査スキルを身につけるためには、自ら進んで動かなければならなかったようです。

卒業論文では現在の職場となる史跡上ノ国館跡をテーマに取り上げました。発掘調査が進められている洲崎館をはじめとし、勝山館、花沢



図 7.3 史跡洲崎館跡を掘る佐藤貢平さん

館を含めた上ノ国の館跡の歴史的な位置づけを検討しました。そうした学生時代の経験を活かし、現在は、史跡上ノ国館跡の整備に伴う遺構確認調査に関わっています。

今年度、史跡洲崎館跡の発掘調査では花沢館跡につづく2例目の懸仏が発見されました。佐藤さん自身が担当者として関わっている遺跡から出土したことは、非常に大きな喜びだったと言います。一方、「考古学の知識が足りていないことは日々感じている」と佐藤さんは語ります。二度はできない発掘調査ですから、まずは上ノ国町内で出土する遺構や遺物について、しっかりと観察し、適切な所見が導き出せるようになりたいと考えています。

「将来は上ノ国の館跡については勿論、道南の館跡についても研究し、多くの人に上ノ国をはじめとした道南の中世について知ってもらいたい」と、抱負を語ってくれました。

(インタビュー 石井淳平)

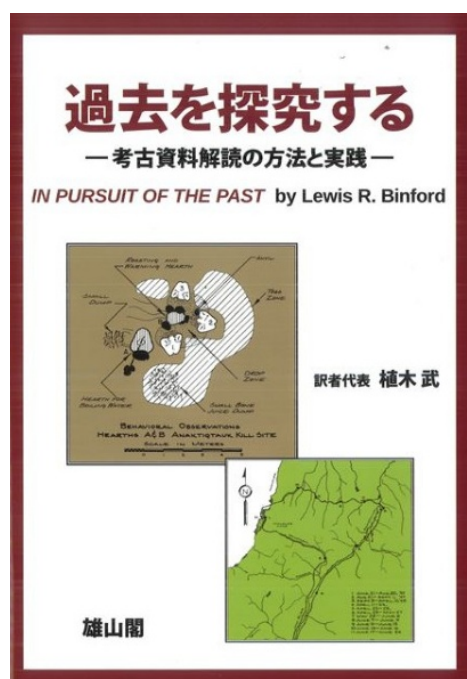
## 書評 プロセス考古学の第一人者、初の日本語書籍

書名 過去を探究する—考古資料解読の方法と実践—

刊行 2021年6月10日

編著者 ルイス・R・ビンフォード

発行 株式会社雄山閣



プロセス考古学の第一人者ルイス・ビンフォード教授の著作のうち、日本語で読める唯一の単著です。ビンフォードは V.G. チャイルドや I. ホッダーなどと並んで日本で最も知名度の高い

海外考古学者でしょう。チャイルドやホッダーの著書は数十年前から日本語訳されていましたが、ビンフォードの著作は長く日本語化されることはありませんでした。本書は考古学ファンにとって待望の一冊といえます。

本書はビンフォードが目ざした「遺構・遺物に意味を与える理論的な道具」の開発について理解するための最良の書です。1980年から1981年にかけて行われた講演・講義記録を中心に成り立っているため、話し言葉をベースとした本書は、翻訳陣の努力もあり、初学者にも読みやすい平易な文体で書かれています。

ページの多くはアフリカや北米の狩猟採集民の観察に費やされています。まるで民族誌の研究書のようなのですが、観察された考古資料から自然の営為によるものと人間の活動の結果によるものを区分し、それぞれの形成過程を考察していきます。大量の考古資料について観察を積み重ねれば自ずと過去の人間活動が見えてくると信じる旧世代の考古学の限界を、多くの事例によって指摘します

「モノに始まりモノに終わる」のが考古学ではない、というビンフォードの声が本書のいたるところから聞こえるように感じました。

(石井淳平)